



第148号

発行所 上高井教育会
発行人 上高井教育会長 博
宮川 編集委員 長 匡
編集人 会報編集委員 祥
滝澤 新聞社
印刷所 須坂新聞社

一年間の教育会活動をふりかえって

上高井教育会副会長 勝山 一男

最初に研究委員会活動について述べたい。本年度の研究委員会活動は、テーマ「ねばり強く自己形成していくための指導の在り方」を掲げての三年次であった。十七の研究委員会は、それぞれ、このテーマに沿って授業展開を図り、二回の研究授業を通してテーマにせまった。

中心講師三枝孝弘先生から年度当初「自己形成の要因」と題しての講演があった。いつもながら、先生の広く深いお話から、子どもを見る目、教材と子どもの活動と教師の関係、自己研鑽に立ち向かう教師の在り方等々、示唆されるところ多いものであった。本年は、国語、保健、算数、図工の研究委員会が三枝先生の直接指導を受けた。その他の研究委員会も、それぞれの助言者をお願いし、研究を深めることができた。研究授業に取り組まれた先生はもとより、授業実践を通じた委員会

活動により、教師として、己の力量向上を印した一年であった。例えば、三枝先生には十二年間にわたってご指導いただき、有難いことであり、深く感謝申し上げたい。今後、先生のご希望もあって退かれることになった。三枝先生のご推薦により、平成四年度から筑波大学助教授谷川彰英先生(松本市出身)をお迎えすることができた。テーマも「子どもにとって、わかり、魅力ある授業のあり方」とし、基礎的・基本的な内容の定着伸長を目指し研究を進めることも決定された。来年度以降の研究委員会活動に期待されること大である。

次に、教育会の活動のもう一つの中核である同好会について述べたい。本年度も十四の同好会が結成され、三百名の会員が、それぞれ研究、研鑽を重ねてきた。毎年継続して中央から講

師を招いたり、夏休みを利用しての夏季研修会を開いたり、臨地、実技、読み合わせ等、その運営に工夫をこらした活動がみられた。その成果を、会誌・会報を通じ、また、研究発表会、展覧会等を通して発表してきたことは、同好会発展のため好ましいことであつた。しかし、世話係・会長会に出されたことの中に「入会者が少ない」「参加者が少ない」等々があった。先輩から「教師は何か一つ得意なものを持って」といわれてきた。素材(教材)に対する広く深い理解をもつことは、確かに教師として大事な側面である。会報第百四十五号の研究所感で小林先生が述べられた「会員の勉強意欲の衰弱」でなければよいがと思う。今後、この課題解決に向けて、同好会日には優先して参加できる職場体制づくりや、都合で参加できなかった会員に、その時の活動内容・資料を送

り届け、会員同志のつながりを大切にしたい。また、魅力ある活動内容の取り入れ等々、さらなる工夫と努力が望まれる。三つめは講演会について述べたい。五月には横浜国立大学教授・環境科学センター長・宮脇昭先生の「人間と環境」。十一月には放送大学教授・日本文化研究所長 笠原一男先生の「日本人の心と文化」。その現在と過去と未来と。宮脇先生のご講演では、日本各地をくまなく足を踏み入れ四十年の歳月をかけて集大成された「日本植生誌」のお話。今、ふるさとの木による「ふるさとの森」の再成運動にかける先生の情熱に圧倒される思いであった。地球環境問題がクローズアップされている時、示唆されることが多かった。

また、笠原先生のご講演では、日本人が築きあげた二千年の歴史と仏教から学んだ日本人のすばらしさを話され、現代を生き抜く日本人の心のよりどころとしての仏教について語られた。この道一筋のお二人の先生に接し、鞭打られた思いである。

最後に、年度当初の活動計画や諸行事が関係各位のご努力により予定通り実施されてきた。確かな一歩となったことを会員の皆様と共に喜びたい。

(日野小)

上高井教育会だより

- 1. 10 第2回研究委員会世話係委員長会
- 18 第44回県女教師研究大会 於信濃教育会館及び県勤労者福祉センター 本会より20名参加
- 21 第2回同好会世話係会長会
- 2. 6 第8回常任委員会
- 13 第9回代議員会
- 17 上高井教育会報第148号発行
- 22 第9回常任委員会
- 27 第10回代議員会・委嘱委員会事業報告
- 3. 15 上高井教育会誌第48号発刊

須高の自然⑧

被托卵鳥・仮親 千曲川のオナガ

堀米 富平



ホトトギス科の鳥は卵を他鳥の巣に生み込み、その鳥の卵より早くふ化し、仮親に育てさせる。千曲川のカッコウは従来ヨシキリに托卵したが近年オナガに托卵している。托卵乗りかえはなぜか。須高で筆者の観察ではオナガが急速に数を増して住宅地庭先、果樹園に入り込んで来たのは昭和37年頃からで、他方カッコウの声が40年頃からしげく聞かれるようになり45年頃には電線や庭先にまで入り込んで鳴く異変を表わしてきた。ちょうどオナガの増殖と機を一にしている。かつてカッコウは高原森林の鳥で朝霧の中に「カッコウ

カッコウ」とくり返していたもの、千曲ではわずかヨシキリに托卵していた。ヨシキリはカッコウが托卵することを覚え、近づいてくると襲いかかる。首尾よく托卵したカッコウの卵は育つ。信大生態研究会を中心とする研究では、このオナガが最近托卵に来るカッコウを攻撃排撃し始めた例を報告している。このオナガの知能、学習力が次第にどのように積み重ねられるか、どのようにしてヨシキリのようにカッコウを排撃する知能が備わってくるか、世界の托卵鳥研究者、鳥進化研究者の眼は千曲川のオナガを見つめている。

オナガにとっても自分の雛が育てられない。オナガは長野盆地は多棲地、日本でも見られない地方が多く局地的に棲息している。北斎は雪中セキレイと題して書いており、少なくとも江戸時代末には須高に現われている。

(高山小)

本年度の実践をふりかえって

本年度も残り少ない日となりました。各校では1年間の教育実践をふりかえり、反省やまとめの学期をむかえておられることでしょう。ここに4名の先生方に貴重な教育研究をお寄せいただきました。ともども味わいながらこの1年間を省みたいものです。

県体研前と後

白金 俊二

十一月に長野県学校体育研究大会(以下、県体研)が終わり、ホッと息をついていたところ。

今年度、四月から森上小学校に転任し、三年智組というクラスを受け持つこととなった。前年度から、森上小で県体研の授業を提供するということはわかっていたので、そのことを意識しながら、学級経営に取り組み始めていった。

四月当初、なんとか子どもたちを引きつけるために、グラウンドでサッカーをしてアピールした。ところが、グラウンドへ出て来ようという動きがない。しょうがないので、そこにいた六年生とサッカーを楽しんだ。そんなスタートだった。一体、教室で何をやっているかわからなかったが、とにかく一言、「外で遊ばなきゃ、ダメになる。」と筋の通らない言葉で呼びかけた。呼びかけたというより挑発したと言った方が適当かな。

まず、男子がちよろちよろとサッカーをするようになる。どうやら、集団を作って遊ぶ経験が少なかったらしく、すぐに文句を言う子や、気に入らないことがあると、平気でその場から離れていってしまふ子がいた。女子は、よくある小グループ化。ボール一個

じゃ、遊べなかった。なんだかんたんで、ようやく以前よりは外へ出るようになったな、と感じ始めたのが六月。体を動かして遊ぶ楽しさをわかってもらうには、僕の頭では強制連行くらいしか考えられなかった。

六月に県体研の事前授業を校内で行った。単元はマツト遊び。忍者になりきって、いろいろな動きを楽しんでほしいという本来の願いから、次第に技術指導に走ってしまふ忍術修行のみで終わってしまったが、もちろん動きの幅は以前よりも広がったので、十一月につながる良い反省ができたことは確かだった。

水泳記録会や運動会などの大きな行事を終え、いよいよ県体研準備が始まる。単元は、よくばって鉄棒遊びと跳び箱遊びの二つを取り入れた授業をすることにした。鉄棒というと、即逆上がりや蹴上がりや思い浮かべてしまふが、事前授業の反省から三年生らしい遊び的な面をもっともっと重視しなくてはいけない。だから一番悩んだのはそこ。跳び箱も同じで、そんな風に常に三年生ということを念頭においた考え方をすれば、ぶら下がり方やとび下がりなど数えきれ

ないほどの動きが考えられる。また、子どもが、いろいろな動きを作ってくれる。本番直前になって、やっとこんなことに気づいた。

参加者一〇人という中で子どもたちは、緊張しながら練習に取り組む。かたくなりながらも、友だちと補助し合ったり、教え合ったりして、十分力を出しきることができたとする。逆上がりのできない子十八人が五人となり、あおむけとびや連続技に取り組みむ子も増え、それなりの成果

社会科の研究授業を終えて

新津 朋典

本年度、上高井郡の研究委員会での研究授業を引き受ける事に決った時、私は正直言って「私なんかの授業で良いのかな。」と大変不安でした。本校は私にとって新卒二校めでしたが、前任校では障害児学級の担任を専門に行い、社会科教育とはほとんど無縁の状態だったからです。昨年度一年間は本校において、社会科の教科担任として勉強してきましたが、まだまだ勉強不足で、他のベテランの先生方に、自分の授業を見ていただく事など、とても恐れ多いと感じていました。

そのような状態でしたが、私が高々とか無事、授業を終える事ができたのも、多くの先生方のご指導があったから

があった。やはり何と云っても「できた」と言う声を聞くことが一番うれしい。冬まっさかりの今、朝早く登校してサッカーをやっている子どもたち。女子もまじってボールを追っている。放課後、ときどき下校時間をやることもある。冷静になってふりかえれば、ずいぶん変わったなアと感じてしまうがな

来年は四年生、高学年の間入り。どこまで伸びるか楽しみだ。(森上小)

だと思いません。特に小委員の先生方には大変お世話になりました。単元展開を検討する時など、夜遅くまで私と付き合ってくださり、いろいろとアドバイスをしてくださいます。また世話係の先生や委員長先生は、資料を探して送ってくださったり、私を自宅に招いてくださり一緒に資料集めまでもしていただいたりしました。私一人の力では行き詰っていたであろう事を、多くの先生方に多方面に渡り援助していただいた事を、この紙上をお借りし感謝申し上げます。

授業は歴史分野「幕藩体制の確立と鎖国」という単元で行いました。私はこの単元は生徒達にとって、小学校から

の知識もあり、興味・関心を持ちながら授業に取り組んでくれる事を期待していました。内容的には楽しく生徒の興味関心をひきやすいのですが、単元展開に工夫を加えないと生徒の意識が持続しないと思われたため、単元展開作りに苦勞しました。幕藩体制確立のための政策には、武家諸法度、大名配置、鎖国などがありますが、それらの政策を生徒の意識が途切れないように関連付けながら展開させる工夫が必要でした。そこで、そのための工夫として鎖国を大名統制のひとつの面としてとらえる展開案を採用してみました。

実際にこの単元展開案で流してみようと思った事は、多くの先生方のお知恵をお借りして作り上げた展開案だけあって生徒達もこの単元に入ってから、目の輝きを変えて取り組んでくれたように思います。普段の授業では沈黙が続く事が多かった事が、ウソのように意見を出す生徒が増えました。単元展開をちょっと変えるだけで、生徒の授業に対する取り組みが変わってくるのだな、と感じました。

本時は朱印船貿易が衰えていった理由を考えていくことから、幕府による鎖国政策の理由を理解していく展開にしました。最初導入の資料として、読み物資料を考えていましたが、本時の数日前になり、その資料は導入の資料と

してふさわしくない、という事になり、グラフ資料に急遽変更しました。授業ではそのグラフの読み取りから学習問題を設定する事ができました。やはり視覚的に訴える資料の方が、生徒の意識をひきつける上で有効であったように思います。また予想の段階では多くの先生方が参観に来られている中で、生徒達は真剣に

生活科の授業実践から

三石 富世

「先生、おはよう。ねえ、早くおもしろ料理作ろうよ。今日、いつもより目が早く覚めちゃったんだよ。」

生活科の授業でおいしい料理を作ると言う日、子ども達の張り切った声が、一階の廊下に響きわたった。あの時の子ども達の生き生きとした顔が、心に残っている。

この授業は、単元の目標「自分の家族の生活や役割に気づき、自分の役割を進んで実行できるようにする」と、「春から育ててきたさつまいもを使っておいしい料理を作りたい。そのおいしい料理を家の人に食べてもらいたい。」という一年生の子どもの願いをもとに仕組んだ授業だった。学習は、「家族を紹介しよう」「私のじまん」「おいしい料理を作ろう」など幾つかの小単元で展開された。子ども達は、私が期待した以上に、

考え発言していました。ただ、私が力不足を感じたのは、意見の練り上げを十分にさせてあげられなかった事が、反省として残されました。教師が場面設定を充分に行えば、生徒は解決学習に真剣に取り組む事ができ社会科でねらう力をつけていく上では大切な事だと思えました。(相森中)

意欲的に活動した。中でも、「私のじまん」は印象的であった。

この「私のじまん」では、子ども達それぞれが、家で出してお手伝いを紹介した。お皿洗いをやっている様子を発表する子ども、自分の上靴を洗ったことを発表する子ども、給食着のアイロンがけをやってみせる子どももいた。発表する子は、どの子も得意気だった。また、実演する友達の様子を見て、子ども達は、感嘆した。「○○ちゃんて、すごいね。」「野菜切りの名人だね。」「ぼくにも、できそうだよ。」「私も、今日帰ったらやってみる。」「こんな風にして、子ども達の中でお手伝いが広がっていった。

こうして、子ども達がお手伝いをした。家の人からそれを認める言葉や手紙が返ってきた。子ども達は、家族への

思いを深め、学校で家の人に食べてもらうために、おもしろ料理を一生懸命に作った。「おいしい。」という一言に喜びを感じ、もっと何かをしようと頑張った子ども達である。こく、日常的なことなのに、家庭の協力を得て、波紋が広がった。勿論、多くの課題が残されたが、家庭と学校、子どもと家族の間で言葉の心のキャッチボールをすることができたことは嬉しいことだった。

また、この様な家族とのやり取りの中で、子ども達の姿にも変化が見られた。机に座っている時には消極的になりがちな子どもが、腕まくりをして活躍した。そして以前に増して、友達を認め、励ます言葉や助け合う姿も見られるようになった。なによりも、子ども達が意欲的に、楽しそうに活動した。

来年度から全面实施という生活科である。以前は、「生活科」と聞くと、正直なところ「なにをどうしたらいいのだろう。」「心配ばかり先走って尻込みしていた。しかし、いろいろな先生方に助言、援助して頂き、授業をやるうちに、わからないながらも、実践を積み重ねていくことが生活科を知る最大の近道であることに気がついた。

教師二年目。失敗だらけの毎日である。しかし、子どもの驚きやつぶやきを見逃すことなく、子どもの願いをキャ

ッチし、これからの実践を大切にしていきたい。生活科は、「あの子ども達の生き生きと活動する姿がみたい。」とい

理科研究委員会授業実践から

小林 宣章

去る七月五日、上高井教育会、理科研究委員会から依頼され、平成三年度第一回理科の研究授業を行った。

今年度の理科研究委員会の研究テーマは「ねばり強く自己形成していく問題解決学習のあり方」サブテーマとして「子供の素地能力を生かした課題追求」である。そこで、三年生の「物質とイオン」という単元に於いて、研究テーマに幾らかでも、近づくためには、どのような単元構成をしたら良いかなど、悩み、苦しんでいる時、相森中学校の西原先生より貴重な御示唆をいただき、暗闇の中に一つの光を発見することができた。特に本単元は直接、目で確認することのできない微視的分野であるだけに、単元構成には苦労した。

本時の授業における、導入の段階での演示実験では「レモンに銅板と亜鉛板の電極を入れると、豆電球は点灯するか」という実験を行った。大半の生徒は「この実験はテレビで見たことがある」と言うことで乾電池でもないのに、レモンで豆電球が見事に点灯

う私の願いに応えてくれる可能性を秘めた教科であると感じている。(豊洲小)

しても、さほど驚きは見せなかった。しかし「それではグレイプフルーツでオルゴールは鳴るだろうか」という実験では「鳴るわけない」という予想を裏切り、オルゴールが奇麗な音を出し鳴り出した瞬間「おー」という驚きの声はどこからともなく起こった。本時を展開するに当たり、導入の段階では少なからず生徒に「感動」を与え、本時への意気込みを持たせることができたと感じた。

生徒実験では「モーターを回すことのできる水溶液はどれだろうか」ということを、身の回りの水溶液を用いて行った。乾電池でもないのに塩酸や酢酸が本単元にモーターを回すことなんかできるのだろうか、という疑問は全生徒にあった。しかし、教師の演示実験で、グレイプフルーツがオルゴールを鳴らした事が頭にあり、もしかしたらどんな水溶液でもモーターを回すことのできるのでは、と意欲的に実験をさせることができた。授業全体を見ても、いつになく生徒が、多くの先生方に見

られていくにもかかわらず、

生き生きとしているようにも感じられた。ただ一人、いつになく緊張し、何をやっているのか分からなかったのが、教師である、この私だったのである。

授業終了後、何人かの生徒から「先生、いつもより緊張していたんじゃない、後で他の先生から何か言われるよ」と等といらぬ心配をしてくれるものもいた。案の定、全体会での席では、私の失敗を見事に指摘された。演示実験を初め、予想の立て方、課題への迫り方など、まだまだ改善すべき点が多いことに、改めて自分の未熟さを痛感したものであった。

今回の授業実践を行うにあたり、約五〇ページにもわたる指導案の作成から当日に至るまでの数多くの予備実験など、私にとっては正直言って非常に辛いものもあったが、何物にも変えがたい、素晴らしい何かが掴めたような気がした。

最後になりましたが、指導案の検討から当日に至るまで貴重なご示唆を頂きました。旭ヶ丘小学校の加藤校長先生また、森上小学校の石井先生をはじめ理科の小委員会の先生方、それと、墨坂中学校の理科教科の先生方に改めて感謝を申し上げます。(墨坂中)

火ばら談義



我が子の道祖神祭りの思い出

佐藤 綾子

先日、実家（小布施町）の小正月の行事「ものづくり」で作ったおだんごをどんどん焼きに持って行った。おだんごを焼きながら、近所の子ども達が放り込んだ書き初めも見てみると、昨年行った長男の初道祖神のお祝いを思い出した。主人の出身地飯山では長男が生まれると一月十五日に初道祖神祝いをする。良い日を選んで、竹の竿（直径15cmくらい、長さ15〜20m）を立てる。頂きに杉や飾り物をつけて。すると、近くの人、親戚等が書き初めを持ってきてくださる。書き初め（巾40cmくらい長さ5〜6m）には漢文が書いてある。例えば、祝（朱墨）公洋君（相手の名）少年易老学難成 一寸光陰不可軽 年月元旦 送り主名

不思議なことに、30本もいただいたのに同じ文は一つか二つだった。自分で書く人もいるが、ほとんどの人は、専門に書く人（商売が成り立っている）に頼む。この書き初め、ぬれると破れるのでビニール袋（専用の袋がある）

に入れるのだが、これがまたまた大変。上を細い竹ひごに結び、専用の木にぶらさげ錦の御旗よろしく上げる。吹き流しのように風にはためき舞い踊る。紙とはいえ、30本もあると重く、滑車の力を借りてもかなりの力が要る。雪も積もっている。濡れないように、切れないようにと一週間気の休まる日はない。

校章・校歌めぐり⑱

森上小学校



森上小学校
は昭和九年七月二十九日に須坂尋常高等小学校森上部分として開校しました。当時としては緑色の壁に赤い屋根の大変モダンな校舎でした。

開校してしばらくは四年生までの学校で、五年生以上は現在の須坂小学校（当時は常盤部といっていました。）へ通っていたので、校歌・校章

思うこと

宮島 道義

人10人位）いく。攻めと守りを繰り返すうち、火がついたどんどん焼き。リーダーの合図で、竿に結びつけた縄を引いたり伸ばしたりして、書き初めをおおる。何回も「倒せ」「起こせ」の合図が飛び、30枚の書き初めは、空を舞う竜のように跳びはねる。そうこうしているうちに、あつという間に火がつき、花火のようにパーッと燃えて全てが天に上り、自分の代には再び行うことのない行事は終わる。朝から何回も祝宴を持ち、接待疲れの目に、星は美しくかつた。主人の町は過疎で、子どもが少なくなっていて、規模も小さくなった。野沢の火祭りは、すごいと聞いた。これ位でも、私たちにとっては、やっと済ませることができたという思いでいっぱいだった。

新聞を開くと、教育問題がのっていない日は無い程である。学校五日制の問題、学力低下の問題、非行・登校拒否の問題等である。そんな記事を読み、考えさせられるいくつかの事がある。

生活のみだれと知的後退―あちこちで、荒れる学級というのが話題になる。男の子の暴力的な行為、ナンセンスな言葉づかい。女の子のせしらぬそぶり、無関心を装って何事にも成りゆきまかせに過している態度が共通して表れているように思う。昔は、女の子の純粋さや、真面目さに支えられて、学級の中に正義が貫徹していた。そして、その純粋さに支えられ、男の子の一つの側面である創造力や行動力が啓発され、それが一体となって学級が大きな力となっていた。

校歌は当時の校長森山貞治先生が作詞、清水弥平先生に作曲していただけてきました。

本校の四十周年記念沿革誌によると、創立二十周年記念行事として、校歌・校章を昭和二十九年十一月十四日に制定しました。

校章は校地内の青桐の葉を図案化し「森上」の文字をつけたものです。青桐のように児童がすくすくとたくましく成長してほしいとの願いがこめられています。（後になつて市章がつけられました。）

森上小学校校歌

作詞 森山貞治 作曲 清水弥平

1. ちかむらさき ちかむらさき ちかむらさき ちかむらさき
2. はなはな ちかむらさき ちかむらさき ちかむらさき

3. ちかむらさき ちかむらさき ちかむらさき ちかむらさき
4. はなはな ちかむらさき ちかむらさき ちかむらさき

5. ちかむらさき ちかむらさき ちかむらさき ちかむらさき
6. はなはな ちかむらさき ちかむらさき ちかむらさき

生活の問題に留らず、公的な発言をしなくなり、知的なもたの対して関心が低くなる。また、概念的・論理的・科学的なもの、真理・真実に背を向ける事になっている。そして、学習そのものが成立しなくなり、勉強のおもしろさ、知的感動というものから疎遠になっていき、学力不振、学力低下にいつそう拍車をかけているように思う。

編集後記

本年度最終号の会報148号を「教育活動の総括」と「本年度の実践をふりかえって」のテーマで編集し、お届けすることができました。本年度の実践を振り返り、まとめたものを大切にして、新たな展望を持って新年度を迎えたいものです。学年末でお忙しいところ、快く原稿をお寄せいただいた先生方、本当にありがとうございました。風邪がはやっているようです。お体に気をつけてお過ごし下さい。（小林・正木）